

---

# ハロルド・M・オーサの事件簿

ちやこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハロルド・M・オーサの事件簿

### 【Nコード】

N3227V

### 【作者名】

ちやこ

### 【あらすじ】

ある日、日本に行ったジーンがバスの中で消息を絶った。双子の弟であるナルは、神隠しにあったジーンを捜すために来日した。来日してすぐに、自分の周りをうるちよろする少女「谷山麻衣」がいた。彼女は、何かを隠しているようで……。ネタバレ考慮なし。

## 1、消えたバス

日本に行った双子の兄が消息を断つたのは今年の始めだった。その兄を捜すために僕はとりあえず日本に来た。

ナル。どうでしたか？

警察の方でも捜査は難航しているらしい

それにしても奇妙な事件ですね。乗客を乗せたままバスが行方不明になるなんて

僕と一緒にイギリスから来たリンと話していると、喚き声が聞こえた。

「ねえ、本当に見つからないの？」

「申し訳ありませんが、こちらも手を尽くしています」

「あたし、帰らないといけないのに……」

「見つかったら知らせるので」

子供のような幼い少女だった。蜜茶の髪と瞳。それが最初に見た彼女の姿だった。

ジーンに乗ったバスは、山道を走っている途中で突如姿を消したのだと言う。サイコメトリでも、その行方は分からず、僕はとりあえず日本に滞在することにした。

どのくらいの期間掛かるか分かりませんので、ホテルを取ることになりました

そうだな

滞在期間が分からず、僕達は東京のホテルに長期滞在することになった。

ユージン・デイヴィス。それが双子の兄の名前である。彼は、英国心霊調査協会に所属する霊媒師で、とても優秀だった。

そのジーンが日本に除霊を頼まれて仕事が終わった後、富士五湖の方を通るバスに乗り、そのまま消息を断った。ジーンは神隠しにあったのだと人は言うが、僕には信じられなかった。

「じゃあ、今度はここをお願いね。気難しい人のお部屋だから慎重にね」

「はい」

出掛けるために部屋を出た後、僕は忘れ物に気付いて部屋に戻った。

すまないが、そこにあるそれを取ってくれないか？

「え？ えっと……」

英語が解らないのか？

これだから日本人は。などと思っていたら、彼女はイスを持って来てジャケットを取っていた。どうやら、背が低くて届かなかったようだ。

ここでは、子供を働かせているのか？ 日本ではそう言うのは少ないと聞いたんだが

僕が嫌味を言うと、彼女の勘に障ったらしい。

「……子供じゃない」

彼女はそう言うのと、僕の部屋の掃除の続きを始めた。それが、二度目に会った彼女の姿だった。

それにしても、二度も僕に会っていると言うのに、彼女は僕に気付かない。自分で言うのも何だが、僕の顔を見て反応しない人間はいないと思う。

ナル。本当にここでよろしいんですか？

ああ。……ジーンの行方不明は単なるきっかけに過ぎないが、以前から日本の心霊現象には興味があったのは本当だからな

あなたの正体がバレないように、日本人のフリをするのがよろしいかと思いますが

まあ、そうだな

日本に分室を置いた。僕は日本人のフリをするために渋谷一也と名乗ることにした。

分室設置からしばらく経った頃、日本の高校の校長から依頼が来た。

「その、それが、「旧校舎は祟られている」と言う妙な噂がありました」

現象としては何てことない。だが、成果を上げないと日本に滞在するのが難しくなってしまう。僕はその依頼を引き受けることにした。

「リン。僕は少し、生徒に話を聞いてくる」

校舎の方に行くと、電気が点いてないのに声が聞こえた。特別教室らしき部屋に女生徒達がいた。どうやら怪談をしているようだった。

「いち」

「にい……」

「……さん」

「し……」

なぜか数字を言い出したので僕は、

「じ」

と、呟いてみた。その途端、悲鳴が聞こえた。どうやら驚かせてしまったようだ。電気を点けると、騒ぎは収まった。

「い、今、「じ」って言ったの、あなたですか？」

「そう…悪かった？」

「なーんだ。腰が抜けるかと思った」

「明かりが点いてないんで、誰もいないと思ったんだ。そうしたら声がしたからつい…」

僕は内心驚いた。そこにいたのはあの少女だった。

（高校生だったのか）

相変わらず僕の方を一度も見ない。他の三人は僕の側に寄って来たのに、彼女だけは遠巻きにしていた。

「麻衣ってば、相変わらず恥ずかしがりやなんだから」

どうやら、彼女の名前は麻衣と言うらしい。今まで恥ずかしがっていたから、僕を見なかったのだろうか。などと考えてみたが、最初に彼女を見た警察署でのことを思い出して、とてもではないがそ

んな性格には思えなかった。

「あたし、バイトがあるからそろそろ帰るね」

「じゃあ、また明日ね」

彼女は女生徒の一人にそう告げると、教室を出て行った。結局一度も僕を見ることはなかった。僕は、話を適当に切り上げて残りの女生徒達と別れた。

その日の夜。ホテルに戻ると、ちょうど彼女が仕事を終えて帰る所だった。

今、帰りか？

僕は試しに英語で声を掛けた。

……先ほど、お会いしましたね

驚いたことに彼女は英語で返事を返してきた。

英語が話せるのか？

まあね。……デイヴィス博士はお兄さんを捜しに来たの？

博士と言われて、僕は驚いた。その時初めて、麻衣は僕の顔を見た。

本当にそっくりだね。ジーンに

ジーンを知っているのか？ 確か、最初に会った時に警察署にいたな

……あたしは、あのバスに乗ってたんだよ

本当か？

どうせ、明日も学校にいるんでしょ。その時、教えて上げるよ

僕は渋々承諾した。

翌日。僕はリンと共に調査先である高校に向かった。麻衣に話を聞くのは放課後に行うことにして、リンと二人でカメラを設置していると、大きな物音が聞こえた。

そこに向かってみると、下駄箱が倒れていた。

「あたし」

リンと麻衣が倒れていた。

「……リン？ 何があったんだ？」

「下駄箱が倒れてきて、彼女が私を助けてくれたんです」  
「立てるか？」

頭を抱えている麻衣に声を掛けた。

「やばい！ 遅刻する！」

彼女はそう言っ、立ち上がると一目散に走って行ってしまった。  
僕とリンは呆然とその様子を見ていた。

「リン。ケガはないか？」

「少しぶつけたようですが、心配ありません」

そう言っ立ち上がるうとしたリンはふら付いた。仕方ないので  
病院に行かせると、捻挫していたらしい。

放課後。麻衣のクラスメイトから聞いていた彼女のクラスに向か  
った。

「麻衣。いるかな？」

「あれ？ 昨日の……何で教室」

「私達が教えたの」

「あ、そうなんだ」

「麻衣もやるでしょ？」

「あたしはいいや」

麻衣がそう言っ帰ろうとするので、僕は彼女を引き止めた。

「ごめんね。今回は、彼女に用があるんだ」

騒ぐ他の生徒達を無視して、僕は麻衣を連れ出した。

「ジーンのことを知っている理由について、話してくれる約束だっ  
たな」

「日本語じゃなくて、英語でいいかな？」

「まあ、僕としてはそっちの方が都合がいいが」

「ありがとう」

彼女はそう言っ、英語で語り始めた。

あたしがジーンと会ったのは、あのバスの中だったの。あたしは  
母と二人あのバスに乗っってたんだけど、ちょっと用事があっ、  
あたしだけ途中で降りて、後から目的地で合流する約束をしてたの

僕のことは、どうして知った？

ジーンが自分の写真の入ったストラップなんか付けてたから、ナルシストみたいって呟いたら、それが聞こえちゃって。そしたら、双子の弟さんの写真だって言ってて。超心理学を研究している博士なんだって教えてくれたの。その後、バスを降りて、用事を済ませた後、目的地に電話を掛けたらまだ着いてないって聞いて……

つまり、君はあのバスに乗っていた生存者と言うことか？

あたしが降りたバス停から、次のバス停まではかなりの距離があって、そこには着かなかったって話だから、そうなのかもね

個人的な質問になるが、なぜ、英語が喋れるんだ？

亡くなった父親が英語圏の人間だったの。と、言っても日本人なんだけど

亡くなった父親？ 母親があのバスに乗っていたと言っていたな。つまり、今は両親がいないと言うことか？

だから、バイトしないといけないの。話は終わったから、もういいでしょ

ホテルの掃除のバイトではたかが知れてるんじゃないのか？

それでも、高校生が稼ぐのって大変なんだよ！

僕の所でバイトをしないか？

イギリスまで行けって言うの？

違う。東京の渋谷に事務所がある。今朝の騒動で、リン……僕の助手がケガをしたんだ

……あの人、背が高かったから力が足りなかったのか

麻衣が今やっているバイト全部の三倍のバイト料を出す。どうだ？

僕の言葉に麻衣はちよつと考えているようだった。

仕事の内容は？

僕は大体の仕事内容を説明した。とりあえず、今やっているバイト全てをイキナリ辞めるのは難しいと言われ、五時まで手伝ってもらった後、麻衣はバイトに向かった。



夜になってホテルに戻ると麻衣に会った。

こんな時間までやってたんだ

まあな

そう言えば、聞くの忘れたけど。あなたのこと、何て呼べばいい？ ジーンは“ナル”って言ってたけど。あだ名か何かなの？ ナルシストのナルとか？

“ナル”は、オリヴァーの愛称。そう呼べばいい

日本人のフリするんだったら渋谷さんって呼ばせるべきだと思うんだけどな。ま、いつか。じゃあ、また明日

その後、麻衣の学校の調査で、何人かの業界関係者に会うことができた。

調査事態は、生徒の潜在的サイキックと地盤沈下が原因だったが、自分でも後から考えるとどうして麻衣を雇ったのか解らなかった。

「それは、まあ、同病相哀れむってやつでしょ」

「どう言う意味だ？」

「同じ境遇の人間は、同じ境遇の人間が気になるってことです」

ジーンがわざわざ、初めて会ったばかりの人間に孤児だったことを明かすとは思えなかったが、そうなのかもしれないと思った。

## 2、設定温度28

麻衣はよく分からないことが多い。両親が日本人だが、父親が英語圏の人間だと言う話。英語がペラペラだが、生まれを聞くと口を閉ざしてしまう。

正体が初めからバレていることもあり、電話や手紙の整理もやらせていた。

「これがS P R宛。こっちがダイレクトメール。これが渋谷サイキック・リサーチ宛」

「……ダイレクトメールは寄越さなくていいんだが」

「じゃあ、リンさんに渡しとくね」

ダイレクトメールを渡されたリンは、どうしていいのか分からないようだった。

「あの、これは？」

「ダイレクトメールです。ナルが自分の所に寄越さなくていいって言うからリンさんに。それと、これは光熱費と電話料金徴収です。

……ナルの冷房代が軒並み高いのが気になるんですけど」

リンに向かって言うてるのに、僕の文句が出た。

麻衣を雇って数ヶ月。季節は夏になっていた。僕は大きな屋敷の調査を受けた。

「ゴーストハントだっけ？ 相変わらず大げさねえ。この機材のヤマ！ どーせ、地霊かなんかの仕業よ」

「綾子って地霊説が多いよね。前の時もそうだったし」

「言われて見ればそうだな」

「そう言うばーさんは、地縛霊説だったよね」

「よく覚えてるじゃねえか」

「お喋りはそれぐらいにしてくれ。機材を置いた後、実験をする」

僕は、この家に住む三人に暗示実験を行った。

「今夜、花びんが動きます。ガラスの小さな花びんです。今夜は、この部屋のテーブルの上にあります」

だが、その暗示を行った直後に反応があった。

「ちよつと来て！」

「どうしました？」

「いいから早く！」

礼美ちゃんの部屋に向かうと、部屋の家具が斜めを向いていた。

「どうなってるの？ こう言うことが収まるようになってくれたんでしょ！？」

「その子がやったんじゃないでしょうね」

「！ できるわけないでしょ！？」

「だな。上に家具が乗ったままだし、俺でもムリだ。それとも、お前、できるのか？」

再び叫び声がして向かうと、今度は居間の家具が全部逆向きになっていた。

「…反応が早いと思わないか。心霊現象と言うのは部外者を嫌う。無関係な人間が入って来ると、一時的に、ナリをひそめるはずだ」

「部外者が来て、怒ってるってことだね」

「まあ、そうだな。普通は反応が弱くなるものなんだ。すごいラッブ音がすると聞いて行ってみると、きしみ程度だったり、それが反対に強くなると言うことは……」

「反発」

「ぼーさんもそう思うか？」

「ああ。この家、俺達が来たのに、カン付いてハラ立てるな。しかも、いきなり大ワザ見せてくれるってこたア、ハンパなポルターガイストじゃねえ」

「…てこずるかもしれないな」

翌日。松崎さんに除霊を頼んだが、その直後に台所で火事が起きた。

「ナル！ 誰がいる！」

麻衣が窓の所に子供がいるのを見た。だが、礼美ちゃんは起きてはいたが、外には出ていないと言った時、ポルターガイストが起きた。

「怖かったら帰ってもいいぞ」

僕がそう言つと、

「別に怖くはないよ。……ただ、礼美ちゃんがちよつと心配かな」と、麻衣は極めて冷静に答えた。

麻衣は自分のことをほとんど話さない。仲が良さそうに見えるぼーさんにも、自分が孤児であることを離してはいないようだった。人形のミニーが色々と教えてくれると、礼美ちゃんが言つたらしい。

「これがミニーか。よくチビちゃんが貸してくれたな」

「礼美ちゃんが寝ちゃつてからなんとかねー」

人形をカメラで撮っている、座らせていた人形が動いた。記録はされておらず、測定機器はエラーを示した。

礼美ちゃんの話から人形に霊が憑いていることが分かり、ぼーさんに悪霊扱いを頼んだが、礼美ちゃんが襲われた上に失敗した。

僕は森下家のある家の所有者を遡ってみた。ここでは、子供が亡くなっていた。それもかなりの数だった。

それから、呼んでおいたジョンと原さんが到着した。

「……子供の霊がいたる所にいますわ。みんな、とても苦しんで……。お母さんの所に帰りたいと言つて泣いています。それに……。この家、霊を集めていますわ。全部子供の霊です……」

ジョンに礼美ちゃんを被つてもらつて、さらに、人形に憑いた霊を落してもらつた。

「……霊は落ちたと思います。けど、滅ぼしたわけと違います。二度と悪用されへんように、焼いてしまふのがええと思います」

ぼーさんに浄霊を頼んでいる最中、居間に大きな穴が開いた。

「……ここには女の霊がいます。奥深い所に潜んで……。母親のフリをして子供達の霊を呼んでいます。……子供達は家に帰りたいのです」

けど、道に迷って出られないのですわ。女は子供達を使って新たな霊を呼んでいるんです」

「とみこ」と言うのは？」

「…女の子供です。女は子供を捜していますの。自分の娘を……。それで子供を集めているのですわ」

「…そう言うことが」

人形「ひとがた」を用意するため、僕が出掛けようとした時、麻衣が玄関口でメモを渡された。英語で書かれたメモを読むと、麻衣はジーンの霊に会ったと書かれていた。

「これは！」

「ジーンにも、自分がどう言う状態なのか分からないみたい。それと、これも」

麻衣はもう一枚のメモを寄越した。何かが挟まっていて、開くと紙ではあったが人形「ひとがた」が出てきた。

「……人形「ひとがた」……。名前が書かれているな。……大島ひろ？」

「あの女の幽霊の名前だよ」

「なぜ、知ってる？」

「ナルは教えてもらっていいの？ 自分で考えた方がいいんじゃないの？」

麻衣はベースに戻る時、さらにこう言った。

「それを使うかどうかは、ナルの勝手だけだね」

一応、大島ひろについて調べた後、リンに麻衣から受け取った紙の人形「ひとがた」を見せた。

「かなり、よくできてますね」

「本物か？」

「……谷山さんは、陰陽師系なのかもしれませんね」

リンの考えに賛同するには、知らないことが多すぎたが、リンにも人形「ひとがた」を用意させ、大島ひろの浄霊を行った。

こうして森下家の調査は終了した。

「だから、言ってるでしょ！ 冷房設定は二十八 ！！」

「僕は暑いのは嫌いだ」

「そりゃあ、そんな黒服着てれば、暑いよね。あたしは、寒いのが苦手なの！」

「ここは僕の事務所なんですがね」

「……じゃあ、ナルを涼しくさせてあげようか？」

「どうやって？」

僕がそう言うと、麻衣は僕の額に手を触れた。その途端、雪の降りしきる景色が頭の中に流れ込んできた。サイコメトリしているつもりはなかった。麻衣はすぐに手を離れた。

「少しは涼しくなった？」

「今の映像は何だ！ 麻衣がやったのか！」

「ナルには猟奇的映像よりも、こっちの方が涼しく感じるかと思っただけだなあ。無理だったか」

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

僕が声を荒げているのに気付いたのか、リンが止めに出来た。

「ナル。そんなに大声を出してどうしたんです？」

「リンさん。ナルが虐めるんです」

麻衣はそう言いながら、リンの後ろに隠れた。

考えれば考えるほど、麻衣の正体は謎だらけだった。

### 3、超能力者疑惑

森下事件のせいで、ぼーさん達はどうかやら僕が陰陽師だと疑っているらしい。その横で、麻衣はそれを否定せずに聞いていた。

秋も深まり、ほとんど冬に近くなった頃だった。ぼーさんが依頼を持って来たのは。

寒がりの麻衣が、どこから持って来たのかドテラなる物を着込んでいた。

「麻衣。何だ？ そのカッコ」

「……寒いから」

「若もんがそんなんじゃダメだぜ」

「高校の制服ってミニだから寒いんだよ！」

「冷え性ってことか？」

「近いけど違う。冷気が強いと、動けなくなるの」

麻衣の言葉に、ぼーさんは啞然としていた。

「…それで？ 今日はどんなご用件でいらしたんですか？」

ぼーさんが言うには、自分のおっかけの子の高校で奇妙なことが起きるのだと言う。そんな話をしている最中に、その高校の校長から依頼が来た。

依頼を受けることにし、生徒や教師達から話を聞いたのだが、かなりの数の心霊現象を思わしき事例が報告された。かなりの数のため、松崎さん、原さん、ジョンの三人も呼んだ。

「原さん。校内を見てみて下さい。とりあえず、霊が出ると言う机と美術準備室……。事故の続く席と陸上部の部室を」

「真砂子と呼び捨てにして下さって構いませんのよ？」

「…松崎さんも付いて行つて下さい。霊がいるようなら除霊を」

麻衣をベースに残し、ぼーさんとジョンにも校内を見てもらい、僕とリンは調査を続けることにした。校内を回っている間、高橋さんがベースに来ていた。

「カサイ・パニック？」

「そ。三年に笠井千秋さんっていてね。超能力でスプーンを曲げちゃうの」

とりあえず麻衣を連れて、その笠井さんに会いに行くことにした。

「……何が、聞きたいわけ？」

「この学校で、怪事件が頻発しているのは、あなたがきっかけになったのじゃないか　と言う話を聞きました。……超能力で、スプーンを曲げたと言う噂も」

「噂じゃなくて、ホントだけど。どうせ、信じてくれないでしょ。超能力なんて」

「スプーン曲げぐらい、あたしにだってできるよ」

僕がそう言おうとした時、麻衣が答えた。

「…出来るの？」

「出来るよ」

「やって見せて」

笠井さんはそう言って、麻衣にスプーンを差し出した。すると、麻衣はスプーンを片手で受け取るなり、紐でも結ぶかのようにスプーンを結んでしまった。

「もうちょつと柄が長いと蝶々結びとかできるんだけどね」

麻衣はそう軽く笑ったが、僕でもスプーンを結ぶところまではできない。その後、どうにか笠井さんから話を聞き、生物準備室を後にした。

「……麻衣。さっきのは何だ？」

「何って、スプーン曲げ」

「あれは、曲げるなんて生ぬるいことじゃない。麻衣はPKの持ち主だな」

「さあ、どうでしょ」

「いつも、はぐらかすな」

「ナルがジーンに会えたら、教えて上げる」

「無理を言っな……。神隠しにあったジーンを捜せと言うのか？」



お前の母親と共に」

「母さんは自分で捜すからいいよ。あたしが言っているのは、ジーンの霊でも構わないってこと。あ、でも、結局は同じことなのか……」

麻衣は少し考えているようだった。これ以上麻衣に聞いても答えてはくれないだろう。

翌日。麻衣がベースで一人きりでいる時に笠井さんが来たらしい。でもさあ、その笠井って子、どの程度信用できるの？」

松崎さんの言うことも一理ある。だが、彼女はインチキではないと判断した。

それからさらに調査を続け、ベースに一旦戻ろうとした時、ベースのドアが開かないことに気付いた。

「開かない？」

「あ！ ごめん！ 今、入らないで欲しいんだけど」

中から麻衣の声が聞こえた。

「何をしてるんだ！」

「ナルは足手まといだから！」

足手まといと言われて、ドアをぶち破ろうとした瞬間、ドアが独りでに開いた。

「……と」

「学校の備品は壊さないで下さい」

「……何をしていた？」

「気にすることじゃないよ。大したことじゃないしね」

「報告はちゃんとしてもらいたいものですね」

「……分かった。先ず一つ目。この学校の至る所に鬼火が見える。

二つ目。今いたのは幽霊……って言うよりも呪詛かな。三つ目。笠井さんが呪詛をするには知識がなさすぎる」

「最後の意味がよく分からないが、麻衣はこの事件は呪詛だと言うんだな」

「まあね。……答え教えられたみたいで面白くないでしょ」

麻衣の言つとおり呪詛だとしたら人形「ひとがた」があるはずだ。手分けして人形「ひとがた」を捜すことにした。

「あら？ 麻衣はどうしたの？」

「さつき、外でお見掛けしはりましたけど。まだ、戻ってはらんよ  
うどすな」

「ロープを貸してくれと言うので、車に入っていると伝えたんです  
が」

「ロープ？ 何で、そんなもん」

「さあ、そこまでは」

時刻は夕方になろうとしていた。麻衣が戻って来ないので、仕方なく麻衣を捜すことになった。原さんと松崎さんをベースに残して捜索をしようとした時、原さんが驚いたように叫んだ。

「麻衣！ どうしたんですの？ その姿は」

「真砂子。イキナリなんだって言うのよ？」

「ここに麻衣がいるんですわ。 裏のマンホールに落ちたん  
ですの？ え？ 違う？ 出られなくなった？」

原さんが言うには、麻衣はロープを使ってマンホールに下りたの  
だが、途中でロープが切られた上に、梯子も壊れたのだと言う。

「何を一人で行動してるんだ」

「……ごめんなさい。でも、真砂子がいてくれてよかったよ」

「麻衣は幽体離脱できんのか？」

「まあね。とりあえず、こちらがマンホールにあつた呪詛の人形「  
ひとがた」です」

麻衣はそう言いながら、大量の人形「ひとがた」をテーブルの上  
に置いた。

その後の調べで、産砂先生が犯人だと結論付けて調査は終了した。  
それからしばらくして、僕は麻衣にサイテストを行うことにした。  
だが、麻衣は僕をあざ笑うかのように平均的な数値しか出さなかつ  
た。

麻衣が能力者であることは明らかだ。

「あんなスプーンの曲げ方ができる人間が、普通の人間であるわけがない！」

僕がそう言うのと、ぼーさん達が興味津々に麻衣を見た。

「麻衣。あんた、スプーン曲げができるの？」

「できるよ。特技じゃないけどね」

「ちよつと、やってみせてくれよ」

ぼーさんはそう言いながら、ソーサーに乗っていたスプーンを差し出した。麻衣は、あの時と同じようスプーンをクニヤリと曲げて結んでしまった。

四人はその様子を見て、驚いていた。

「こんなの人間業じゃないぜ」

「だったら何で、サイテストは普通なのよ？」

「麻衣さん。ズルしておまへんか？」

ジョンの言葉に、麻衣が舌を出しておどけた。

「全部当てることができるんだったら、逆も可能だし、能力のないフリだってできるってことだよ。さあ、あたしの嘘はどっちでしょう」

超能力は本当じゃないのか。それとも、あるのか。

麻衣は謎は益々深まるばかりだ。

#### 4、寒がりな少女

冬になって、麻衣は雪が降ると仕事に来なくなつた。

「給料を減らすぞ」

と、脅しても、

「寒い中出て行くぐらいなら、それでもいい」

と、答えた。

十二月に受けた依頼の影響がまだ続いているのか、麻衣の寒がりな拍車が掛かつていた。それから一ヶ月以上経った日の二月のこと。とある高校から依頼が来た。僕は最初断つたのだが、生徒会長の安原さんと言う人物が依頼に来た。彼は最初、ドテラ姿の麻衣を見て驚いていた。事務所でその格好はやめると散々言つても、滅多に客が来ないし、大して深刻でもない人は、この姿を見て帰って行くと言ひ張つた。

「緑陵高校の生徒会長をしています。安原修と言います」

「……今、学校はひどい状態です。最初はありがちな怪談がいくつあつただけでした。それが、今では毎日、変なことが起こっているんです。みんな不安で心細い思いをしているんです」

「……正直言うと、緑陵高校の事件には興味を持っています。ただ、僕は、マスコミと関わるような事件は……」

「お気持ちは分かります！　ぼく達も、毎日押しかける取材に迷惑していますから。だからこそ、いつそう早く、事件が解決されることを願っているんです。どうか、お願いします！」

ぼーさんに協力を頼んで緑陵高校に行くと、最初に依頼に来た校長、それと松山と言う先生がいた。

「嫌味な先生だったね。あんなのが自分の学校にいたら……色々試してみたくなくなっちゃうな」

「色々ですか？　どんなことをするのか、ぼくも教えてもらいたいですね」

「あ、お勧めはこれです」

麻衣はそう言いながら、一枚の札を取り出した。

「何だ、それは？」

「嫌な人間を自分に近付けさせないの」

「何で、そんなもん持ってたんだ？」

「それはともかく、これ、安原さんに上げます」

「ありがとうございます」

安原さんは戸惑っているようだったが、札を受け取った。

事件の内容を聞いている内に、坂内と言う生徒の名前が出て来た。自殺したと言う彼が原因なのかは分からなかったが、夜にはリンが松崎さんを連れて到着した。

僕は、手伝ってくれると言う安原さんに、麻衣のサポートを任せることにした。

「それにしても、麻衣って何者なのかしらね。この間のスプーン曲げといい」

「綾子来る前に安原少年にお札を渡してたんだけどさ、それがかなり、よくできてんだ」

「本物ってこと？」

「よく見ないと分からんが、チラツと見た感じでは偽物ではないと、俺は思った」

翌日。原さんとジョンが到着した。霊が見えないけれど、感じる  
と原さんは言った。

「強い感情を感じます。…何か 学校で辛いことがあったのではないかしら。学校に囚われてます。この近くにはないのに、こんなに心配が強い……。きっと、自殺した霊だと思います。そんなに昔の話ではありませんわ」

どうやら、坂内君の霊が見えるらしい。

「谷山さんって不思議な方ですよ。最初のドテラ姿には正直驚きましたけど、彼女がくれたお札を持っていたら、授業や自分で用事があって近付かない限り、松山に会わなくなっただんです」

「それは、麻衣の渡した札が効いていると言うことですか？」

「こう言う類を信じているわけじゃありませんけど、普通に考えるとありえませんか」

「まあ、ただの偶然と言うこともあります」

安原さんの言うことが本当なら、麻衣は陰陽師の類なのだろうか。……とりあえず、ここはもういいですから、先にベースに戻って下さい」

「分かりました」

それから麻衣が放送室で火事が起きると言ったので、放送室にカメラを置くことにした。明け方近くに火事は起きた。

「……麻衣さん。顔色が悪いと違いますが？ 気分でも悪いんですか？」

「気分じゃなくて……。寒いのに！」

「あんたって、本当に寒がりね」

「寒い嫌い！ 昔を思い出すから……」

「昔って、あんた、雪の中にでもいたこともあるの？」

「……子供の頃、雪崩で死に掛けたことがあるの」

麻衣のその言葉に衝撃が走った。その後は、寒がってばかりいて詳しいことは聞けなかった。

「雪崩なんかに遭えば、寒いのが苦手になるはずだな……」

「でも、死に掛けたって……。よく生きてましたわね」

「ナルは雇用主として、今の話は知ってたんか？」

「いや。初めて聞いた」

それから、テープを取りに行かせると、麻衣は霊に襲われたと言った。寒い理科準備室にいたせいもあって、突然、麻衣が暴走した。松山先生！」

「何だ、いきなり！」

麻衣は松山先生に掴みかかると、こう言った。

「呪われているのは、あなたです！」

と、言った後、高熱を出して引っくり返った。

「何なんだ、こいつは？」

「すみません。熱出して、暴走したみたいで」

ぼーさんが言いながら、倒れた麻衣を抱えた。麻衣の言葉が気になって、ヨリキリ様に使われていた紙をリンとぼーさんに見てもらうと、松山先生が狙われていることが分かった。

だが、呪詛にしてはコックリさんの類で呪えるとは思えなかった。体が温まってどうにか回復したらしい麻衣がこう言った。

「霊による蠱毒が行われているの。ナルとリンさんで頑張つて……」  
人形「ひとがた」を使って生徒の方を守ることにし、調査はどうにか終了した。

それからしばらく、麻衣は温かくなるまで事務所に来なかった。体が寒くなると、熱を出すらしい。

#### 4、寒がりな少女（後書き）

ちなみに作者は、真冬は半纏を着ています。



## 5、嘔吐き

暖かくなってから麻衣がバイトに出て来るようになった。

「寒いと外に出られないって、学校はどうしてんだ？」

「バイトだつて嘔吐いて休んだり、中に服を着込んだりとかしてる」

「じゃあ、真冬のアンドの制服姿ってブクブクってことじゃない」

「服は着膨れでも、体は痩せてるんです！ 綾子ほど太ってないもん！」

「何ですって！」

「まあまあ、それぐらいにしておくれやす」

話に盛り上がっている麻衣達に僕は声を掛けた。

「盛り上がっているところを悪いのですが、あなた方は何のために来たのか覚えていらっしゃいますか？」

僕がそう言うと、ぼーさん、松崎さん、ジョン、麻衣の四人は姿勢を正した。

「事件の依頼を受けた。そこで、全員に協力を頼みたい。結構大きな事件になると思う。依頼主は内密に処理したいようだけど、マスコミがかぎつければ大騒ぎになるのは目に見えてる。本来なら受けたくはないんだが、多少事情があつてやむをえない」

「それは、大橋さんとおっしゃる代理人の方からの依頼ではございません？ あたくしのところにも先週依頼がございましたわ」

「では、原さんは別行動になりますね」

「もちろん、あたくしなりに協力はさせていただきますわ」

「ともかく、僕は極力目立つことは避けたい。そこで、安原さんに身代わりをお願いすることにした」

「ナルちゃんのマスコミ嫌いは分かるが、影武者を立てるほどのことなのか？」

「そうでなければ、わざわざ安原さんに来てもらったりしない。依頼主は、他にも何人か霊能者を集めたようだが。そのほとんどが、

マスコミでもはやされてはいるが、うさんくさい連中だ。僕は、ああ言った連中と係わり合いになりたくない」

「…ハン。自分がイヤなことを他人に押し付けるわけか」

「気が進まないなら、帰ってもらっても構わないが？」

僕がぼーさんに嫌味を言うのと、まどかに怒られた。

「…もうっ。どうして、ちゃんとお願ひしないの！ 人に物を頼む時には、それなりの口調つてもものがあるでしょう？ いつも言ってるのに、学習効果のない子ね！ ごめんなさいね！ この子、礼儀を知らなくて」

まどかはいつまでも僕を子ども扱いする。

「まどか！ 黙っていていただけますか。話が進まない」

「あら、そうね。ごめんなさい。だったら、口の聞き方に気を付けてね」

まどかは、そうニツコリと笑って言った。昔からまどかには勝てない。僕は調査員の一人として、長野県のある屋敷の調査をするこ  
とになった。

「ようこそおいで下さいました。わたくしは大橋と申します。今回の件については全権を任されております。わたくしを依頼主と思っ  
ていただいても結構です。ところで、所長さんは……」

「あ、ぼくです。所長の渋谷一也と申します」

「お聞きしてた通り、ずいぶんとお若くていらっしゃる。そちらの皆様は」

「親しくさせていただいている霊能者の方達です。今回の件で協力を  
お願いしました」

「あ、滝川法生と申します」

「松崎綾子です」

「ジョン・ブラウンと言います」

「こちらの三人は、ぼくのアシスタントです」

「谷山麻衣です」

「 鳴海一夫と言います」

「林興除と申します」

「中国の方ですか？」

「もとは香港です」

「「えー!!!」 そうなのー!!!」

ぼーさんと松崎さんが騒いでいた。だが、麻衣は驚いていなかった。

「麻衣は驚かないのね」

「何となくだけど、知ってたから……」

他の協力者を紹介している最中、麻衣が苦笑していた。僕が依頼を受けた理由を理解したらしい。原さんのように口止めしているわけではないが、今更麻衣が、僕の正体を話すことはないだろう。

それから、大橋さんから表向きの調査の内容を聞いた。平面図を作り、各部屋の温度を計った。計測から戻って来たぼーさん達がオリヴァー・デイヴィスの話で盛り上がっている間、僕はカメラの設置を続けた。

「デイヴィス博士って、新しいやり方考えた人の割りには、歳いつてた感じだよな」

「何だ」。麻衣もデイヴィス博士の論文読んだのか？」

「…… 箆っている間に、ちょこつとね。じゃあ、一人で頑張ってるナルを手伝いましょうか」

麻衣がどこまで本当のことを話しているのか分からなかった。僕が嫌味を言う前に、麻衣の言葉にみんなが気付いて、手伝い始めた。「麻衣ー。ちゃんと家に了解取つとけよ。長くなるって」

「すでに了解取つてあるから大丈夫だよ」

麻衣は自分のことを話さない。両親がいらないと言っていたが、どこまで本当なのか。

他の協力者と共に降霊術を行った翌日、失踪者が出た。僕はまだかに連絡して、その女性について調べてもらった。だが、さらに失踪者は続く。

僕はサイコメトリしてみることにした。

「ナル。サイコメトリするんだったらやめた方がいいと思うけど」  
「なぜ？」

「どう考えても危険だと思うから」

「なら、麻衣には分かるのか？ 失踪者がどこにいるのか」

「どこ、って言うのは明確には分からないけど、生きていることはありえないよ。それと、真砂子に降霊術させるのもやめた方がいい。霊が多すぎるもん。どうせ、リンさんがその手のことはできるでしょ」

「まあ、そうだな」

それから安原さんが抜けて、リンの降霊術をさせることにした。そして、壁には「ヴラド」の文字が残った。

「そうか、浦戸つてのはヴラドのことだったのか！」

驚くぼーさん達の横で、麻衣は何の反応も見せない。そのことに彼らは気付いているのだろうか。僕らはさらに、閉ざされた壁の中から遺体を見つけた。

「ワタシは違います。ワタシは、デイヴィス違います！ 名前はレイモンド・ウォールです。博士ではないです！ 南サンが「デイヴィス」と言え」と言っただけです」

偽者の方もカメラに収めることができ、撤収することにした。

「麻衣がいなくなった？」

「気付いた時にはいなかったのよ」

「一緒に部屋に戻ったはずなのに……」

麻衣が失踪した。

「ナル。インカムの一つがなくなっています」

そう言われて、もしかしたら麻衣が持って行ったのではないかなどと考えていると、通信が入った。

『リンさん 聞こえますか？』

「谷山さん！ どこにいるんですか？」

『壁の向こう側なんです。ちょっと、さすがに出られなくて、穴を開けてもらえませんか』

「ヴラドは……？」

『大丈夫です。襲われたわけじゃありません。ちょっと、連れて行かれただけですから』

それからどうにか、壁の薄い所を壊して麻衣を救出した。

「あー。空気が美味しい！」

「お前は一人で何をやってんだ」

「真実を追究するのも、研究者の役目でしょ」

「俺らにも教えてもらえんのかね？」

ぼーさんの言葉に、麻衣はニツコリと笑っただけだった。

麻衣が何をしたのかは分からないが、美山邸の調査はとりあえず終了した。

## 6、夏の思い出

夏になり、僕らは石川県能登半島の依頼を受けた。不覚にも一日で霊に憑依されてしまった僕は、自分の不甲斐なさを感じてPKを使った上にさらに入院する破目になった。

「ナルって、学習効果がないって森さんが言ってたけど、本当にそうですよ」

「まあ、その通りですね」

麻衣の言葉に、リンは苦笑した。言いたい放題言われているが、倒れたのは事実なので、何も言い返すことができずにいた。

「ナルの目も覚めたことだし、みんなに知らせて来ますね」

麻衣はそう言っただけで病室を出て行った。入院を余儀なくされて、僕は他にケガをしたばーさん、安原さんと共に入院生活をした。

「あれ？ 滝川さん。読書ですか？」

「おう。以前、入院してた患者が置いてったんだろうな。なかなか面白いぜ」

「ハロルド・M・オーサ？ 誰ですか？」

「ま、デイヴィス博士よりも知られちゃいねえだろうな。ASPR所属の博士だ。一説によると、デイヴィス博士と同じぐらい若いって話だけだな。ハロルド博士もPKの持ち主らしいが、本人は予言や予知に関する研究者なんだ」

「へえ。なかなか面白そうですね」

「だろ？ この間の偽デイヴィス博士もそうだったが、彼と同じくらい謎の多い人物なんだ。偽者の数も半端じゃねえし、本人は絶対に表舞台に出て来ないからな」

ばーさん達がそんな話をしているのを聞いた。僕は、そのハロルド博士の論文を読んでみた。分野が違うので今まで彼の論文を手にとったことはなかったが、読んでみるとなかなか興味深い内容だった。

「自分が預言者などとは思えない。だが、私が言ったことのほとんどが、遠くもない未来に起きてしまったことは事実なのだ。未来を変えることは、私の永遠のテーマなのかもしれない」

本の最後の方に簡単なプロフィールが書かれていた。

「ハロルド・M・オーサ。アメリカ心靈調査協会所属。年齢非公表。日系アメリカ人。十歳の時に父親を亡くし、アメリカの富豪であるモリガン・オーサの養子となる。日本に興味がある」

「……お見舞いに来たよ」

ノックの音が聞こえた。だが、僕はそれを無視した。

「また、そんなもの読んで……。あれ？ 何だ、仕事のファイルかと思っただけ違う」

「ぼーさん達が面白いつて言って読んでいたからな、ちょっと興味が出たんだ」

「ふーん。えつと……ハロルド・オーサ？ と言う人なの？」

「預言者らしいな。それでPK所持者」

「ナルは会ったことあるの？ 同じSPRの系統でしょ」

「いや。話に聞いたことがあるだけだ」

「じゃあ、どんな人なのか知らないんだ。ナルぐらい若いのかな？」

「どうだろうな」

僕は入院二週間ほどで自主退院することにした。リンには散々言われたが、あまり入院が長引くのも考えものだ。

「こっちに乗れるのは五人までだからな。一人、リンの方に乗ってもらふことになるけど誰か」

「真砂子の方があたしよりも小さいから、真砂子が乗った方がいいんじゃないかな」

麻衣はそう言って原さんを勧めてきた。原さんなら僕の正体を知っているのだ、まあ仕方ないかと思っただ。

「本当は、あたくしではなく、麻衣を乗せたかったんじゃないかもしれません？」

「なぜ、そう思われるんですか？」

「今回の調査。ナルは憑依されていたから知りませんでしょうけど、麻衣は大活躍だったんですね。ナルでも、麻衣が何者なのか分かりませんか？」

「何度か尋ねてもはぐらかされてしまいます。……歳の近い原さんなら、話すのではありませんか？」

「……ただ、あたくしどうも、麻衣に会ったことがあるような気がするんですわ」

「僕の時と同じようにですか？」

「ビデオではなく、直接ですわ。どこで会ったのか覚えていませんけど」

東京の街中ですれ違ったり、落とし物を拾ったとか、その程度なのだろうと思っていると、後ろを走っていたばーさん達の車が前に割り込んできた。

「何をやってるんだ、あいつらは……」

「予定していた道と違う方に向かおうとしています」

リンはクラクションを鳴らした。だが、ばーさん達は気付かないようだった。散々道に迷い、どうにか国道に戻る途中、僕は湖の側を通った時、リンに停まるように言った。

「リン！　ここで停まってくれ」

「どうしたんですか？」

湖を見て、僕はジーンをサイコメトリした時に見た景色と一致すると思った。

「……やっと、見つけた……」

僕はキャンプ場に残ることにした。

「僕は、ここに用がある。麻衣達は東京に帰れ」

麻衣を残らせるかどうかは、考えものだが、麻衣も残ると言った。「ここで帰っちゃうと、あたしの目的が果たせないもんね」

結局、全員が残ることにしたようだった。麻衣の目的と言ったのが何なのかよく分からないが、色々聞き出すには材料が足りなかった。ジーンの遺体を捜す間、僕らは廃校の調査を受けた。メンバーが



子供に取って代わられる中、麻衣はなぜか冷静だった。

「……ナルはこう言う仕事をするんだったら、少しは除霊ないし、浄霊ができるようにならないとダメだと思っけどな」

「僕の分野じゃない」

「まあ、そうだね」

「……麻衣なら浄霊できるのか？」

「できるよ」

麻衣はあっさりと答えた。それから僕らは離れ離れになり、しばらくして、開かなかった扉が開くようになった。麻衣の浄霊は成功したらしい。

翌日。僕やリンと一緒にいるところを安原さんに引き止められた。何が始まるのかと、麻衣を見ると、彼女は目線を反らした。

ぼーさん達による僕の正体推理ショーのようなことだった。

「それで、ナルって何の愛称なのよ？」

「教えてやりなよ、ジョン」

「……No11でしたら、O l i v e r……。オリヴァーの愛称でおます」

「オリヴァー……」

「「SPR」のオリヴァーさんだ。一人いるだろ。身分を隠さなきゃならないような大物が」

「デイヴィス博士……？」

僕の正体を全く知らなかったのは松崎さん一人だった。

「もう一つ、俺は麻衣の正体についても考えたんだ」

「麻衣の正体……ですの？」

「そう。麻衣は、教えてくれねえか？」

「あたしとしては、ぼーさんの推理の方を聞きたいな。ナルよりは性格はまともだと思ってるから、質問してくれたらYesかNoで答えてあげるよ」

「その言葉に期待しましょう。まず、麻衣はPKを持っているのは明らかだ。以前見せてもらったスプーン曲げ、あれが超能力じ

やなかったら相当な怪力の持ち主になる。それと、麻衣はナル同様に日本の出来事に弱い。ナルと違って純日本人なんだろうが、生まれや育ちは日本じゃない」

「じゃあ、ナルと同じイギリスってこと？」

「それは分からないが、麻衣、お前の出身地はイギリスか？」

「No」

「どこか教えてくれないのか？」

「質問はYesかNoでしか答えないよ」

「じゃあ、これまでの推理は大体あつてるのか？」

「Yes。両親が日本人だけど、あたしは日本育ちじゃない」

「じゃあ、次だ。麻衣は以前、雪崩に遭って死に掛けたことがあると言っていたな。雪崩で助かる人間は少数ながらいる。PKを所持するほどの女性で、雪崩で助かった人間はいなかった」

「では、谷山さんの能力が出たのは死に掛けた後と言うことですか？」

珍しくリンが食いついた。

「女はいない。だが、男で該当する人物がいた」

「まさか、麻衣は男ですか？」

「No。真砂子はあたしが男に見える？」

「それも、そうですね」

「それで、ぼーさんが行き着いた麻衣の正体は何だったんですか？」

「ハロルド・M・オーサ。ASPR所属の博士だ。少年やジョンと共に詳しく調べてみたら、麻衣の話に共通する事柄が幾つかあった。それに以前、少年がもらった札。ハロルド博士は、日本のまじないに興味があるらしい。本人が日本人の血を引いていることもあったんだろうが。ってことで間違いないか？」

「……Yes。ぼーさんってすごいよね。ナルだって分からなかったのに。最初の内に、ナルにはぼーさんよりも情報を多く与えてたんだよ」

「どんなことだ？」

「ぼーさんが僕の方を見た。僕が答えないでいると、麻衣が自分で答えた。」

「それで、お前は何の目的があつて日本に来たんだ？　僕が日本に来ることを知つて日本に来たわけじゃないだろう？」

「あたしの両親は、あたしが生まれて間もない頃に離婚したの。母はあたしを父に押し付けて日本に帰った。父はあたしの能力を気にして、世間から隠れるようにして山の中で暮らしてたの。あたし、アメリカ育ちの日本人だった父から英語と日本語の両方を教わつて十歳の歳まで育つたの」

「それは、十歳の時まで学校に行つたことがなかったと言うことですか？」

「正確には十三歳まで。十歳の時に雪崩に遭つて、あたしは三年間意識不明だったの。目覚めた時には父は亡くなつた後で、あたしは孤児になつた。その後、あたしのことを知つた今の父であるモリガンがあたしを養女にしてくれたの。彼は、SPRの会員で、ASPRにも所属してたんだよ」

「麻衣は学校はどうしてるんですの？」

「大学には一度入つたんだけど休学中」

「……それで、日本に来た理由は？」

「あたしが十五歳になつた年の十二月に、日本に帰つた母が亡くなつたと言う知らせを受けたの。天涯孤独だったらしくて、身内はあたししかいなかったの。アメリカにいるよりも、日本の方が暖かいかなと思つて来たんだけど。ただ、その母が成仏していないことが分かり、調べている内に母の死の原因が交通事故であるが分かつたの。バスの運転手をしていた人が犯人だったんだけど、幽体離脱してその母を説得している時に、そのバスに偶々乗車していたジーンに会つたの」

「じゃあ、バスに乗り合わせたと言うのは嘘だったわけか」

「まあね。完全な嘘でもないけど。母の浄霊はジーンがしてくれたの。その時、ナルのことを聞いたんだ。オリヴァー・デイヴィスに

ユージンって言う兄弟がいるのは元から知ってたから、ジーンの本名と、兄弟がナルって言うのを聞いて、尋ねてみたら「そうだ」って言われて。ただ、その直後にトンネルに差し掛かった時、何だかすごく嫌な予感がしたの。だから、ジーンにバスから降りるように忠告したんだけど……」

「それでバスが消えたのか……」

「バスがトンネルに入った瞬間、あたしはバスの外に弾き出されたの。トンネルの闇の中で消えて行くバスも見てる」

麻衣は手を握った。その時のことを思い出しているのだろう。

「……麻衣は、それで僕に近付いて来たわけか」

「一つはデイヴィス博士のサポートをするため。霊体とは言え、ユージン・デイヴィスを最後に見たのはあたしだったし。それから、あたしはデイヴィス博士がジーンの遺体を発見する場面を予知しているの。自分の予知が本当かどうか確かめるためもあったの」

「それで、あんたはジーンの遺体が見つかったらアメリカに帰っちゃうわけ？」

「そのつもりだよ。……ちょっと居心地よくなってたけど。それにしても、真砂子ってずっと気付かないもんだね。あたし、真砂子に昔、一度会ったことがあるんだよ」

「あれ。そうでしたの？」

「まあ、今は変装してるから気付かないだろうけどね」

麻衣はそう言いながら、自分の荷物の中から一枚の写真を取り出した。ロングヘアを二つ縛りにし、メガネを掛けて、白衣を着ていた。

「これが、麻衣ですの？」

「昔のあたし。この頃は、実は髪の毛染めてたんだよ。博士号なんかもらっちゃって、博士のイメージを考えたらこんな感じになっちゃったの」

「麻衣さんの今の名は、ハロルドさんでよろしいんですか？」

「ハロルド・マイ・オーサが正式な名前。名前のせいで男と勘違い

するの多いんだけどね。春から秋まではいいんだけど、寒い所にいると熱出しちゃうもんで表向きは代理人を立ててるの」

それから、ジーンの遺体は引き上げられた。トンネルで消えたバスと共に。中にはジーン以外にも運転手と老夫婦の遺体もあった。

日本の怪奇現象と一時期は騒がれたが、元々メディアに出ていた原さんが表に立つことによって、僕のこと、麻衣のことも世間に出ることはなかった。

僕がイギリスに帰るよりも先に、麻衣はアメリカに帰国した。

「麻衣にはもう、会えないんですのかしら……」

「そうだな……」

「ナル。ASPRだつてSPRの一部なんだから、どうにかなんないの？」

「なぜ、僕に言うんだ？」

「それは、渋谷さんがここの所長だからですよ。谷山さんがいないのは寂しいですしね」

自分の所に所属しているのならともかく、ASPRの博士ではどうしようもない。麻衣の帰国から一週間後、僕とリンはイギリスに帰国する。送別会をすると言い張るばーさん達が事務所に詰めていた。

「じゃあ、そろそろ行くか」

その時、カランとドアベルが鳴った。クローズにしていたはずなのだが、と思ったら蜜茶の髪が見えた。

「こんにちは」

「「麻衣!!」」

ばーさん、松崎さん、原さんの三人が同時に叫び、リン、安原さん、ジョンの三人が顔を見合わせていた。

「あんた、アメリカに帰ったんじゃないの？」

「帰ったよ。お土産持ってたの」

「お土産って、帰る時に大量に買っていたアレですか？」

「そう。それで向こうのみんなが、日本の皆さんにとってアロハシャ

ツとか色々と持たされちゃって」

麻衣はそう言いながら荷物を出した。

「ぼく達てつきり、谷山さんは戻って来ないと思ってました」

安原さんの言葉に僕以外の全員が頷いた。

「……ナルのことだけだったら、あたし、わざわざ高校に入ったりしません。それに、お父さんに勧められたんです。もうしばらく日本にいた方がいいって」

「じゃあ、麻衣は日本にいることになるんですの？」

「とりあえずは高校を卒業するまではね。……ナル。また、雇ってくれる？」

「役に立つんだったらな」

僕の皮肉に麻衣は苦笑した。

## 7、日本に来た理由（前書き）

神隠しの状況と、麻衣が日本に来た真相です。

## 7、日本に来た理由

寒いのは嫌い。雪崩に遭って以来、あたしは体温調節ができなくなった。

自分を捨てた母親が亡くなったと言う知らせを受けて、日本に向かったのは十五歳の冬だった。アメリカよりも緯度の低い日本の方が温かいかなと思ったのは内緒だ。

母は交通事故で亡くなった。あたしは唯一の肉親だったため、葬式を出したんだけど、母が成仏していないことに気付いた。

『こんな所にいた！ いつまでもこんな所にいちゃダメだよ！』

あたしは自分を捨てた母と言うこともあって、いつもよりも冷静じゃなかったんだと思う。

バスの運転手に取り憑いていた母を説得していると、小さく声を掛けられた。

「ダメだよ。そんな言い方したら」

それが、ジーンとの出会いだった。幽体離脱している自分が見えるなんて、不思議に思っていると、彼は母を説得して浄霊してくれた。

「君は……生霊みたいだけど」

『幽体離脱中なの』

「そうなんだ。僕もできるよ。でも、勝手にやると弟に怒られるんだ」

『弟さん？』

「うん。双子の弟でさ、ナルって言うんだ」

『ナル？ あなたの名前は？』

「ジーンだよ。ユージン」

ジーンとナルと言う名前を聞いて、あたしは一組の兄弟を思い出した。

『もしかして、ナルって、オリヴァー・デイヴィスのこと？』



「知ってるの？」

『まあ、少しね。それよりも、ジーンはどうして日本に来たの？  
あなたのこと、デイヴィス博士の論文に書いてあったのを読んだこ  
とがあるわ』

「除霊を頼まれたんだよ。仕事はもう終わったけど、ちょっと散策。  
君は、どうしてわざわざ幽体離脱してまで、お母さんを説得してた  
の？」

『……あたし、小さい時にさっきの母親に捨てられたの。だから、  
肉体がある状態であの人と会つと、自分が制御できないの』

「そうなんだ……」

傍目には、ジーンが独り言を言っているように見えるだろう。バ  
スはトンネルに差し掛かった。何だか、嫌な予感がした。

『ジーン。バスを降りた方がいい』

「え？ 無理でしょ、そんなの」

『早く！』

あたしがそう叫んだ途端、あたしはバスから弾き出された。トン  
ネルに入って行ったバスは忽然と姿を消した。

ジーンその他、乗客は老夫婦だけで、運転手も含めてたった四人し  
か乗っていなかった。だけど、あたしは確かにジーンが乗ったバス  
がトンネルから忽然と姿を消すのを見た。

アメリカに戻ったあたしは、そのことをASPRのメンバーに伝  
えた。

バスが消えるなんて、現代の神隠しだわ

しかも、オリヴァー・デイヴィスのお兄さんが乗っていたって言  
うのかい？

本人がそう言ってただけだけど、霊媒師の才能があるのは確かだ  
わ。幽体離脱中のあたしと普通に会話したもの。とにかく、SPR  
の方から、デイヴィス博士かユージン・デイヴィスの写真を手に入  
れて

どうするの？

彼がジョーンかどうか確かめるのが先決よ。……本物だった場合、恐らくサイコメトリで兄を捜しに行くデイヴィス博士と接触を図ってみるわ

マイがいなくなると困るよ

そうよ。他の人でもいいじゃない

デイヴィス博士のやり方を知るにはいいチャンスだと思うの。それに、消えたバスを最後に見たのはあたしだけなんだもの。その情報が必要でしょ

こうしてあたしは、日本名の谷山麻衣と言う名前で日本の高校に入った。警察署やホテルは、わざといたけれど、まさか、学校で会うとは思わなかった。

事情を聞かずに入れてくれたけど、あれは、校長に感謝かな。おかげでナルに近付くきっかけになった。

だけど、一番驚いたのは、最初の調査でジョーンの幽霊に会ったこと。彼の様子は、明らかに幽体離脱ではない状態だった。

「ジョーン！ あなた、一体どこにいるの？」

「……水の中」

「あのトンネルから空間移動したってこと？」

「多分ね」

「どの辺りか分かる？ あたし、あなたの弟さんと一緒にいるんだけど」

「ナルと？ そうなんだ。……多分、湖の中だと思う」

「富士五湖？」

「日本の地理はちょっと分からないんだ。麻衣は分かる？」

「あたしも全然。……ナルのサイコメトリに頼るしかないね」

あたしがそう言うと、ジョーンは苦笑した。あたしが、ジョーンに会ったことをナルに伝えてもいいのかと言うと、ジョーンはしばらくは死んだことを報せないで欲しいと言った。

だけど何度かそんな状況が続いた後、あたしは報せるべきだと判断した。ナルがジョーンの遺体を発見する場面が見えてしまったから

神隠しから一年半以上の月日が流れ、ナルはようやくジーンの遺体と共に行方不明だったバスを発見した。真砂子がナルの身代わりに表に出ることによって、ナルの存在は表に出ることはなかった。東京に戻ってから、あたしはアメリカにいる研究所の中間達へのお土産をみんなと一緒に買いに行った。それからアメリカに帰国した。

ただいま。みんな、元気にしてた？

マイ！ いつ、帰ってたんだ？

さっきだよ。これ、日本のお土産

着物ね！

着物じゃなくて、浴衣って言うんだよ。こっちは扇子

あたしはお土産を広げて、みんなに配った。

家に帰るのも久しぶりだった。養父のモリガンは、実の父とは違ってあたしに優しくかった。

マイは本当にいい顔をするようになったね

そうかな？

自分では気付かないんだね。君は恋を知ったね。……デイヴィス博士が好きかい？

分らないわ。でも、ある意味貴重な経験だったと思う

日本にはもう行かないのかい？ SPRは日本支部を作ろうとしているそうじゃないか。ASPRに所属している麻衣なら、引き抜きと言う形も取れる

……戻ってもいいのかな？

アメリカは故郷だけど、日本のみんなにもう一度会いたいと思った。

マイ。君の仲間は、そんな人達なのかい？

あたしは結局、一週間で日本に戻った。

「……ナル。また、雇ってくれる？」

「役に立つんだったらな」

デイヴィス博士の皮肉に、あたしは可笑しくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3227v/>

---

ハロルド・M・オーサの事件簿

2011年8月4日03時21分発行